

Waltzing Matilda

7L2WVR 久保木尊史

皆さんは「Waltzing Matilda」（ワルチング・マチルダ）という曲をご存じだろうか？

昔からのアマチュア無線家なら知っている人も多いかも知れない。

オーストラリアでは「第二の国歌」と言われ、オーストラリア人ならまず歌えない人はいないだろう。

100年くらい前に作られた歌だが、内容は、

ひとりの陽気なスワッグマン（放浪の旅をする季節労働者）が沼のほとりでキャンプした。

ユーカリの木の下で彼は歌を歌いながらお湯が湧くのを眺めて待っていると、

一匹の羊が沼の水を飲みに来た。

彼は羊を捕まえて食料に、自分の革袋に入れた。

農場主が3人の騎馬警官を連れてサラブレッドに乗ってやって来た。

そして彼に言った。「その革袋に入ってるのは誰の羊でどうしたんだ？」

彼を捕まえようとする、彼は沼に飛び込んで言った。

「お前らに俺は生きて捕まらないさ！」

今でも時々、沼のほとりを通ると彼の幽霊の声が聞こえるかも知れないよ。

「さあ、毛布を革袋に入れて僕と旅をしよう。」と。

色々調べて、こんな内容みたいだ。

英語が全く苦手なので、間違っていたら許してほしい。

以前は詩の内容から、これが第二の国家になるほどの歌なのかなぁ？と思った。

だが、調べていくうちに、オーストラリアという国の歴史や社会制度など、当時の時代背景があり、人々の間に深く浸透したようだ。

その当時、オーストラリアでは白人同士でも差別があり、上の身分であるスクォーター (Squatters) と下の身分であるセレクター (Selectors) に分けられてたそうだ。

歌詞では、「スクォーターが騎馬警官3人を連れてやってきた」とある。スクォーターは当時、警官などに賄賂を渡して味方につけ、不平等が横行していたという時代背景がある。

また、羊泥棒は絞首刑だったそうで、彼らに捕まったら確実に絞首刑だ。

なので彼は捕まるより自ら沼に飛び込んで死ぬことを選んだ。

オーストラリアの人々に、この時代背景と彼の心意気、不平等な権力に対する反骨心は今も息づいている心なのだろう。

僕がこの曲と出会ったのは、中学生当時、BCL (Broadcast Listening) が流行っており、ソニーのスカイセンサーだの、ナショナルのクーガーだのと、短波放送が受信できるラジオを買って、夜通し海外の放送を追いかけていた。

その中でオーストラリア国営放送(ABC)の海外向け放送「ラジオ・オーストラリア」を聞いたのが最初だ。

短波放送は始まる5分ほど前から、自局を示すシグナル、「インターバルシグナル」を流すのが習慣だ。

その国や放送局によって特色あるインターバルシグナルがあり、それを聞くだけで、これはどこの放送局だと分かるようになる。

当時、ラジオの周波数表示はアナログダイヤルのみで、PLLシンセサイザーによるデジタル表示などない。

だから放送局側は自分の放送の周波数にリスナーが合わせられるように、インターバルシグナルを流した。

ラジオ・オーストラリアのインターバルシグナルは、ワルチング・マチルダのサビの部分オルゴールで繰り返し流し、オープニングはワライカワセミの鳴き声で始まった。

日本とオーストラリアの間は伝搬が良く、ラジオ・オーストラリアも強力に入感した。スタジオはオーストラリア最南端のメルボルン、送信所は北部のパースだ。送信出力 250KW だったかな？ 巨大なカーテンアンテナからの日本語放送を毎日楽しみにしたものだ。そんな中で番組中に時々流されるワルチング・マチルダに親近感が湧いてきた。

ハリベラフォンテのレコードにワルチング・マチルダが入っていると知り、LPレコードを買う。とてもワクワクして針を落とした。だが、流れてきたのは全然違う曲だ。

「え〜？」と、レコードの曲名録とにらめっこし、解説の紙を読む。すると、確かにワルチング・マチルダだが、レコードに収録されているのは、オーストラリアの現地の子供に教わった「正調のワルチング・マチルダ」ということだった。

「2バージョンあるのか！」と、当時はビックリした。のちに調べると、作られた当時の曲はハリベラフォンテが歌った曲の方で、クイーンズランドバージョンと呼ばれているようだ。

そののち歌詞の権利が紅茶会社に譲渡され、CMソングで使われるために新しい曲が付けられ、歌詞も少し修正された。現在広く親しまれているのはこの新しい曲だ。

ワルチング・マチルダは速めのマーチ（行進曲）やアップテンポのフォークソングとして歌われることが多いが、どちらかというバラード風な感じが僕は好きだ。

今は YouTube で沢山のワルチング・マチルダの動画を観ることが出来る。

そんな中でもオーストラリアの女性歌手、デルタ・グッドレムが豪華客船クイーン・エリザベスで歌う動画が一番のお気に入り。1 番の歌詞とサビのみという短い、客船運営会社 CUNADO（キュナード）の宣伝？動画だが、曲のアレンジ、画面構成など、自分の好みの動画だ。

下記にリンクを書いておりますが、リンク切れの場合はご容赦ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=y8je9Mk48Ic>

また、オーストラリア人がこの曲を大好きだと感じる動画リンクを貼っておきます。

André Rieu という世界的なバイオリニストがオーストラリアでのコンサート、その中でかれが弾き始め、サビの部分になると誰からともなく大合唱。これもちょっと感動的。

<https://www.youtube.com/watch?v=7UFmwArST-I>

ワルチング・マチルダを聞いて中学時代を送り、アマチュア無線にも興味を持ったが、試験を受けて HAM になるのはそれから 15 年以上も後のことになる。

だが、中学時代に世界中の放送局の電波を追いかけ、雑音とフェージングの中、何千キロ、何万キロも離れたところから届いてくる電波に耳を傾けた時の、あの緊張感とワクワク感、外国と小さなラジオだけで繋がっている不思議、それは FT8 でパソコンの画面を追いかけている今も変わらない。

ワルチング・マチルダを聞くと短波帯の電離層を介した電波を追いかけていた 50 年前のあの頃を思い出し、電離層の不思議と無線通信に改めて感動を覚えるのだ。